

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14403

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2022

課題番号：16KK0056

研究課題名（和文）記号論的アプローチに基づく意味構成過程のモデル構築（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Constructing a theoretical model of meaning construction from the semiotic perspective of cultural psychology(Fostering Joint International Research)

研究代表者

小松 孝至 (Komatsu, Koji)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60324886

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,300,000円

渡航期間： 7ヶ月

研究成果の概要（和文）：文化心理学の記号論的アプローチに基づいて子どもの自己を捉えるために研究代表者が提示したPresentational selfの概念（Komatsu, 2010）について、Jaan Valsiner教授（デンマーク、オールボー大学）とともに理論的に精緻化し、相互作用における意味構成と自己の生成に着目した理論モデル（理解の枠組み）を生成した。これは関係志向的に、解釈者としての観察者を含めて意味構成のプロセスを捉えるものである。また、当モデルの実証的基盤である子どもの意味生成と自己のあらわれについて、生活の中の多重的な弁証法的緊張関係に基づくこと、また、制度的文脈（学校教育）との関連を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもたちを含めて、私たちは常に過去を意味づけ、未来を予測しつつ生きている。そしてその過程ではことばが重要な役割を果たしている。この過程は「意味構成」として捉え得ると同時に「自己」が明確化するプロセスと考えることができる。これは、心理学上の問いとしても重要な観点であるが、十分な理論的整理がなされてこなかった。本研究は、子どもの保育での経験をめぐる幼児と母親の会話や、児童が小学校での指導の下で書いた日記などを題材としながら、意味構成と自己のあらわれを捉える理論的なモデル（理解の枠組み）を作成した。このモデルは、子どもが参加するものに限らず多様な相互作用の分析に適用可能である。

研究成果の概要（英文）：This international project aimed at the construction of a theoretical framework to understand the process of meaning-construction and the emergence of self in interaction. It is accomplished by elaborating the concept of Presentational self (Komatsu, 2010) that is based on the semiotic approach of cultural psychology, and through the collaborative work with Prof. Jaan Valsiner (Aalborg university, Denmark) who is the leading researcher in this area. This theoretical framework focuses on the process of meaning-construction stressing its relational nature and the importance of interpretation by observer. The analysis of children's meaning construction, that is the empirical foundation of this framework, suggested that the process is based on multiple dialectic tensions in their lives. Its relationship with institutional settings, school education in concrete, was also discussed.

研究分野：発達心理学・教育心理学

キーワード：発達心理学 文化心理学 意味構成 自己 弁証法 記号的媒介 モデル構築 社会・文化的アプローチ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

発達心理学や教育心理学においては、インタビューデータや相互作用データの質的分析を中心に、当事者の固有の意味構成(meaning construction, 例: 経験された出来事に関する意味づけ) を重視する研究が少なくない。また、人間の個別性を十分反映して描き理解することをめざすこれら質的研究はもちろん、心理学において多用される質問紙調査等でも、こうした「言葉の意味」が、たとえば質問紙の各質問項目を通してどのように立ち現れるかを理解することが重要と考えられる。

ところが、こうした諸研究において、言語を媒介とした個人の意味世界のなりたちの過程について十分な基礎的考察がなされてきたとはいえない。たとえばインタビューによる多くの質的研究においては、研究協力者が発した表現そのものが、結局のところ個人の経験内容として示される。しかし、言葉が「意味を持つ」とはきわめて動的かつ複雑な現象である。たとえば、研究協力者が発した発話を研究者が解するとき、異なる人物(研究協力者・研究者)の異なる過程に基づく「意味」が生じる。そして、それが研究としてまとめられれば、読者の視点(理解)もかわる。また、質問紙調査やインタビューの質問項目については、研究者が発した表現を協力者がどう解するかにおいて同様の問題が生じる。これらは、記号としての言葉と個人の意味世界のなりたちを、研究者の立ち位置も踏まえ理解する枠組みの必要性を示唆している。

本研究の基課題(基盤研究(C) 相互作用における意味構成への記号論的アプローチと心理学方法論の再検討 課題番号 16K04301)は、このことに関する理論的枠組みを、これまで研究代表者が取り組んできた子どもの自己に対する記号論的なアプローチ(Presentational self¹, Komatsu, 2010)の延長線上で検討するものであり、記号論的アプローチによる心理学理論の第一人者である Jaan Valsiner 教授(Aalborg 大学, デンマーク)の助言のもと、心理学の調査を含むさまざまな相互作用で「意味」が生じる過程の包括的・理論的なモデル化を試みるものであった。

2. 研究の目的

本研究は、この基課題の試みを、長期の国外出張による Valsiner 教授との共同研究により高度かつ詳細なものとし、理論的なまとめを行うとともに、さらなる展開を模索することを目的とする。これは研究代表者と Valsiner 教授の研究交流の延長線上にある。研究代表者は、2007年度以降、1年に1度(計8回)研究経過を Valsiner 教授のセミナーで発表し詳細な助言を得てきた。それをふまえてこれまで

日常生活場面での幼児と母親の会話をもとにした、Presentational self の概念の提案

上記概念を、実際の教育現場での相互作用に適用した、小学校で実践される日記指導等における子どもの表現や、授業場面の相互作用の分析

を実施し、子どもが言葉を媒介として表出した内容を、子どもの自己の明確化プロセスとして捉える試みを続け、複数の論文を発表した。これらは、心理学におけるいわゆる「自己論」であると同時に、子どもたちが日々出会い経験する内容を意味づける過程の分析でもある。本研究ではさらなる理論的精緻化をはかるため、基課題と共通する形で次の諸点に着目する。

意味構成と自己のあらわれにおける他者性(otherness)の役割の理解

意味構成における対話的(dialogical)・弁証法的(dialectic)な過程の理解

本研究では、これらについて、研究代表者がすでに持つ質的データの分析とともに、質問紙調査やインタビュー調査など、多くの心理学研究で用いられる手法において生じるプロセスも視野に入れ、相互作用における言葉を媒介とした意味構成とそこで機能する他者性と対話的過程をモデル化する。

このことで、相互作用分析をはじめ、広く心理学の方法に理論的・方法論的貢献をもたらすとともに、文化心理学の研究拠点である Valsiner 教授の所属先での研究交流を通じ、生成された理論・分析枠組が、国外の発達・教育分野の研究において広く用いられることが期待される。

3. 研究の方法

上記の通り本研究は理論的なモデル化(理解のための枠組みの構成)を目的とし、そのためのデータとして研究代表者が収集してきた母子会話の録音記録(100時間以上)、小学校での子どもの日記の記録(1000篇以上)、授業観察の録画記録等を用いる。従って研究の方法は実験や調査によるものではなく、上記のデータを Valsiner 教授の助言の下で再分析し、理論的モデル構成をするとともに、当該領域の研究者からの助言を得て考察を精緻化することによる。具体的には次の方針で共同研究を実施した。

¹ Presentational Self (Komatsu, 2010) の概念は、多くの心理学研究のように、「自己」を個人(子ども)の内省の結果(質問紙における質問項目やインタビューへの回答)からとらえるのではなく、子どもが参加する会話などでの種々の表現における意味構成の過程から、意味構成者である子どもの固有性として観察者が見出すものとして概念化された。つまり、意味が生起するところに、表裏一体の形で「自己」があらわれるとする理論的立場であり、同時に意味構成を捉える観察者(端的に言えば研究者)の役割を重視する。なお、当概念はドイツ語の die Vorstellung を Presentation とする英訳から生成されたが、die Vorstellung の定訳である「表象」の心理学における用法が原語の意を十分表現できないことから英語表記を用いる。

本研究が対象とする意味構成の過程に関し、Valsiner 教授は理論レベルで多くの考究（例 Valsiner, 2007）を発表している。Valsiner 教授は、特に心理学の草創期から発展期にかけての諸研究、たとえば、ゲシュタルト心理学の勃興から展開にかけての諸研究（A. Meinong, C. von Ehrenfels など）、L. S. Vygotsky をはじめとしたロシアにおける 1920～30 年代の心理学研究、アメリカのプラグマティズムにおける J. H. Mead や C.S. Peirce, J. M. Baldwin などによる理論について、日本ではほとんど知られていない文献も含めて大量の文献をドイツ語やロシア語の原典を含めて理解し、その相互の関係も把握している。しかし、研究代表者が取り上げてきた会話や日記など現実の意味構成過程にみられる「ゆらぎ」「ぶれ」、また、観察者の位置づけを取り込んだ枠組みをつくりあげるためには、Valsiner 教授の理論的考察を実際のデータに当てはめながら継続的な議論を進めることが望ましい。そこで本共同研究では、研究代表者が Valsiner 教授のもとに長期滞在を行い、教授の持つ理論的考察と、多方面にわたる膨大な文献の集積を効果的に参照するとともに、Valsiner 教授との協議の上、Aalborg 大学をはじめとしたヨーロッパ圏内の心理学研究者から助言を得た。

この理論的なまとめは、単一の論文とするには多様な内容に及ぶため、英文書籍等の形で発信することとし、Valsiner 教授が Series Editor を務めるシリーズ書籍（モノグラフ）の 1 巻とすることとなった。なお、計画の中に含まれる国際的な論文集の編集・発刊の遅れ（コロナ禍）のため、当初の計画から 3 年の延長を行った。

4. 研究成果

本研究の主たる理論的まとめは、Komatsu (2019a) にまとめられ公刊された。この成果は本基金によりオープンアクセスとなっており、無料でアクセス可能である。また、これをふまえた発展的な内容については、制度的文脈における自己をめぐる国際的な論文集を編集集中であり、その一章としてすでに執筆されており、内容の一部は国際学会等で発表済みである。これらの概略は以下のとおりである。

Presentational self 概念の理論的精緻化と心理学方法論の再検討 (Komatsu, 2019a)

意味構成と Gestalt quality としての自己 (Chapter 1-3): 子どもたちをはじめ、我々は常に記号を用いながら過去を意味づけ、未来を予測しつつ生きる存在である。そうした意味構成の過程は、同時に我々の「自己」が明確化するプロセスといえる。L. S. Vygotsky や S. Langer らの考察、また、C. von Ehrenfels による Gestalt quality のアイデアをふまえて概念化するなら、自己を意味構成のプロセス全体から観察者が「見てとる」ものとして考察する必要がある。これは、Presentational self（観察者にとって固有の意味を創出する、会話における自己と他者の布置から現れる自己 (Komatsu, 2010, p.209)）として概念化できる。

Presentational self の基本的枠組みと心理学方法論としての位置づけ (Chapter 4): この概念は、現在主流の心理学における自己の概念化、すなわち、個人の内面に安定した実体として想定される「自己像」とは異なる。本研究が提案するのは、意味構成の「過程」から理解される自己であり、その基本的枠組みは、保育園での経験に関する母子の会話を例とするなら図 1 のように示すことができる。

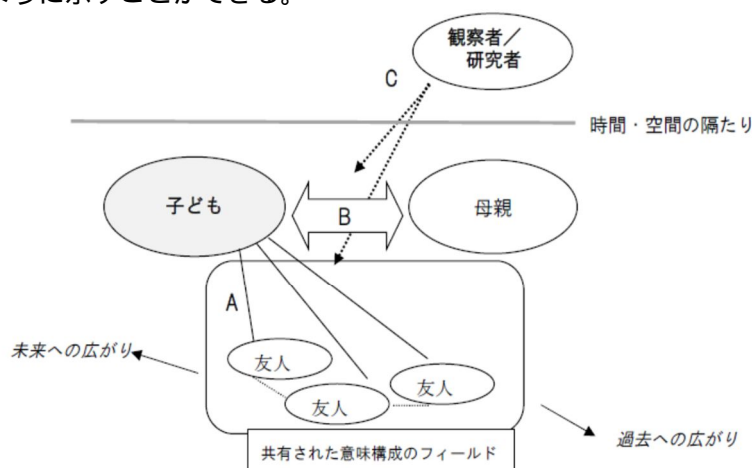


図 1 Presentational Self の枠組み (Komatsu, 2019, p.48, Fig 4.2 を翻訳)

ここで子どもの自己とは、会話という共有された意味構成のフィールドの中で子どもと他の子どもたちが比較され作り上げられる布置(図中 A),そしてそれを通して子どもと母親が互いに位置づることから見える布置(図中 B)を、観察者(研究者)が時間・空間の隔たりを超えて観察することで理解される(図中 C)。

なお、先に述べたようにこの方法論は、自己へのアプローチとして、関係志向的・解釈志向的な観点から、意味構成のプロセスに焦

点をあてるものであり、これに対して、質問紙調査などはいわば意味構成の結果に焦点をあてるものといえる。ただし、相互作用のプロセスを分析するとはいえ、Presentational self の枠組みにおいて捉えられたものが、相互作用の現場においてその当事者に感じ取られる自己のあり方とは異なることにも留意が必要である。

経験を書くことによる意味構成と他者性 (Chapter 5): ここでつくられた枠組みを、特定の宛

先を想定して経験を書くことによる意味構成（小学校の活動として書かれた児童の日記）に適用すると、そこでは、Presentational self 概念の基礎となった親子の会話とは異なる、多重な形で他者性(otherness)が機能していることを見とることが出来る。つまり、書くことによって自己の経験がいわば外在化されることによる他者性と、想定される読み手（ここでは担任教諭）の存在という他者性であり、さらに、子どもたちはしばしば他者との会話を書くことにより、意味構成を促進していた。こうしたプロセスによる自己の明確化は、歴史の中で綴方教育や作文教育が強調してきた意義ともつながりうるものである。

意味構成を支え促進する弁証法的プロセスと生活の構造（Chapter 6-8）: Presentational self の枠組みにおいては、具体的な発話の進行における意味構成が、記号論的アプローチで強調される弁証法的なダイナミクスによって、つまり「A」という発話に付随する、潜在的な意味生成のフィールドである「non-A」との緊張関係の中で発生・展開していくとされている。本研究では、この、いわばミクロレベルの弁証法的ダイナミクスに加え、子どもたちの生活の中にある構造自体が、意味構成を促進する弁証法的な緊張関係にみちていることを考察した。

端的に言うならば、それは生活の中に遍在する再会(reunion)と、そこから生じる 2 種類の緊張関係「可視 <> 不可視(visible <> invisible)」「同一 <> 非同一 (same <> non-same)」である。我々が再会をくりかえすことは、互いが可視・不可視の存在になることを意味する。ここで再会が再会として成り立つことは、自他の同一性が認められることによるが、同時に、その不可視性は同一性の脅威ともなる。本研究が考察した意味構成の具体的なプロセス（会話や日記）は、こうした繰り返し構造と弁証法的な緊張関係が基礎になっている。

意味構成と自己のあらわれを支える制度的文脈の特徴（Komatsu, 2019b 他）

上で述べたように、本研究が構成した意味構成と自己のあらわれを捉える枠組みは、個人の中で文脈から独立して生起・発達するものではなく、生活の中にある様々な再会などのプロセスと不可分な側面を持つ。特に、本研究が実証的な検討対象とした幼稚園・保育所に通う子どもと母親の会話や児童の日記などは、学校教育という制度化された文脈と結びついている。

こうしたことから、学校教育に代表されるような制度的文脈がどのように子どもの意味構成を支えるのかについて、Komatsu (2019a)をふまえさらに多面的な検討を加える必要があると考えられたため、冗長性(redundancy)に着目して考察を行った。ここでの冗長性とは、学校への通学等が毎日の繰り返し構造をもち、さらにその中で同質の文化的価値を持ち我々の行動を制御する記号（たとえば「他者への敬意」）に繰り返し接することを意味する（Valsiner, 2007 を参照）。これは、Valsiner (2007) の示した発達の三層構造（微視発生（microgenesis）、中間発生（mesogenesis）、個体発生（ontogenesis））の mesogenesis のプロセスにも該当する。

このような繰り返し構造と冗長性は、文化的価値に繰り返し接することによって、子どもたちが自分自身を明確化する意味構成のための記号システムを身に付けることと結びつくことはもちろんである。たとえば、幼稚園に通う子どもたちがそこで繰り返し接するカテゴリー（例：昼食や活動のための班の名前やそのメンバー）は、自他を関係の布置へと位置づける記号システムとなり、それはさらに価値づけを含めた子どもたちの特徴や関係（例：「なかよし」）も含み込んで発達していく。

しかし、冗長性はさらに新たな意味構成の基礎としても意味を持つ可能性があり、古くは J. M. Baldwin や G. H. Mead による考察においても検討されている。本研究ではこのことを大きく 2 つの観点からまとめる。1 つは、そうしたプロセスが、日本語においていわば「ふつう」と表現されるような理解の枠組みをつくりあげることである。これは、たとえば児童の日記の記述において塾のできごとが毎日繰り返し書かれる例のように、安定した自分の理解と結びつくこともあるが、別の児童が「（その日に）とくに何もしていない」と書くように、「ふつう」ではない何か特別なことに殊更敏感になり、また、それを自己を明確化する経験として求めるといった意味構成ともつながる。

もう 1 つは、そうした繰り返し構造が、ある種の意味の喪失をもたらす（たとえば、クラス内のルールは毎日ふれるものでありながら同時にしばしば無視される）とともに、別の意味づけを生じさせる可能性を持つことである。子どもたちの意味構成にもまた、こうした例がみられることがある。

以上の議論は、学校に見られるような制度的文脈が、一方では子どもたちが安定した自己記述を行う基礎を提供するとともに、繰り返されるものとは異なる新たな意味構成を生起させる文脈となることを示唆している。そこでは、冗長性は排除されるべき無駄としてではなく、新規性をもたらす土台となる。

以上の成果に加え、本研究実施期間中には、Presentational self の枠組みを用いて、幼稚園における 3・4・5 歳児の異年齢保育のクラスにおける給食（準備）場面の縦断的観察記録の分析や、小学校 6 年生の国語の授業（物語の読解）における意味構成と自己のあらわれに関する既

存データの発展的考察などを行い，このモデルが幼児期から児童期にかけてのさまざまな場面（特に学校教育にかかわる場面）における子どもの自己を捉える上で有用であることを示した。

本文中の引用文献

Komatsu, K. (2010). Emergence of young children's presentational self in daily conversation and its semiotic foundation. *Human Development*, 53, 208-228.

Komatsu, K. (2019a). *Meaning-making for living: The emergence of the presentational self in children's everyday dialogues*. Springer.

<https://link.springer.com/book/10.1007/978-3-030-19926-5> （オープンアクセス）

Komatsu, K. (2019b). Micro- and Macro-processes of the construction of children's selves in school education: The role of redundancy in meaning-making. Paper presented at 18th biennial conference of International Society for Theoretical Psychology, Copenhagen.

Valsiner, J. (2007). *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. New Delhi: Sage.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Koji Komatsu
2. 発表標題 Multiple dialogues in classroom discussions and the emergence of children's selves: How children's voices appear and disappear in collective processes
3. 学会等名 11th International Conference on the Dialogical Self (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小松孝至・岡崎成志
2. 発表標題 関係の中にあられる子どもの「自己」をめぐる考察 - 「保育の中で子どもの自己を観察する」とはいかなることか -
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 繰り返すとゆらぎのなかに自己を見出す - 子どもの自己への記号論的アプローチ -
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Koji Komatsu
2. 発表標題 Micro- and macro- processes of the construction of children's selves in school education
3. 学会等名 18th biennial conference of International Society for Theoretical Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Komatsu
2. 発表標題 Reunion in daily life and the emergence of children's selves
3. 学会等名 10th international conference on the dialogical self (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Koji Komatsu	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 144
3. 書名 Meaning-making for living: The emergence of the presentational self in children's everyday dialogues	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Meaning-Making for Living https://link.springer.com/book/10.1007/978-3-030-19926-5
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ヴァルシナー ヤーン (Valsiner Jaan)	オールボー大学・The Faculty of Social Sciences and Humanities・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
デンマーク	オールボー大学			